

同級生の小説

原田宗典 『十七歳だった！』 集英社文庫 他

大田清隆 『夕焼けの彼方に』 文芸社

山本 政人

いたのかもしれない。

トランプを拾い集めるトロのまるめられた背中
の幼さに、いまの娘が気づくころはずはない。『ら
いおんみどり』の魔法に満ちた幻想世界が、何の

ことはない若い人たちの日常そのものだというこ
とに、昨夏の私はまだ思い至っていなかったのだ
から。

(尚綱女学院短期大学)

面白い本が見つからない。書店に行けば、文字

通り山のように本があるが、そのなかから面白い

ものを見つけるのは至難の業である。

私はときどき自分で小説を書いてみるが、読む

ことよりも書くことの方が面白いし、楽しい。仕事としてではなく、自由に想像し、創作することは、もしかすると最高の幸福かもしれない。人に読んでもらい、肯定的に評価されることも嬉しいが、それは二の次のことで、自由に創造することがまず楽しい。

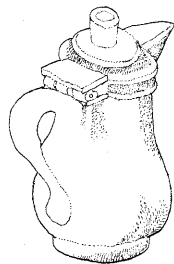
私は無器用であるため、音楽とか絵画とか芸術には縁がなかったので、創造というと文学しかなかった。それで下手な小説を書いて一人悦に入ったりしているが、それにはきっかけがあった。それは高校時代の同級生に作家がいたことである。

その人が高校の同級生であり、かつ有名な作家であるということを知ったのは、だいぶ後になってからだった。妹に指摘されてその人の作品を読んでみると、なるほど高校のときのことか書いてある。登場人物で思い当たる者の顔も思い浮かぶ。ただ、肝心のその人の顔が浮かばない。その

人とは原田宗典氏である。

原田氏の高校時代、そして私の高校時代のことを書いた作品は、多少のフィクションを交えているとはいえ、概ね実際の出来事である。そしてこれらの作品は衝撃的だった。原田氏の作品がユーモアに溢れていることは確かだが、高校時代のことは面白おかしく書かれていくわけではなくて、出来事そのものが面白おかしいのである。私はこんなに面白おかしい高校生活を送っていたとは思っていなかった。受験勉強だけの暗い高校生活を送っていたかのように思い込んでいた。

ところが原田氏の作品を読んで思い出したのである。結構楽しいどころか、かなり面白い高校生活だったことを。私自身、授業中なの



になぜか教室を抜け出して友達とピンポン玉で野球をやっていたり、掃除の時間にやはり野球遊びをしていて、バットに見立てた箒で見事教室の窓ガラスを粉砕したりした記憶が甦り、何と自由奔放な高校生活をしていたのだろうと思つたものである。暗いと思つたのはガールフレンドができなかったためだろうか。あんな面白い時代を思い出させてくれた原田氏には感謝している。

先日、大学時代の同級生から本が送られてきた。『夕焼けの彼方に』という小説である。著者の大田氏とは大学に入学してすぐ知り合いになり、その後よく彼の下宿で麻雀をした。彼はさだまさしが好きだったのか、麻雀の最中いつもさだまさしの曲をかけていた。それから彼は短歌が上手で、歌には外見からは想像もつかない（失礼）純粹さと素直さがにじみ出ているのだった。送ら

れてきた本の帯にも彼の歌が紹介されていた。

いまだしも いにしへ人の気配あり

はるかの道より我に袖振る

歌から想像がつきそうだが、小説は大学生である主人公が奈良を一人で旅するところから始まり、そこで出会った若者たちとのその後の関係と、主人公の心の動きが丹念に描かれている。同じ世代で、同じような生活をしていたせい、主人公たちの心の動きがよくわかり、描かれている友情なのか恋なのかはつきりしない微妙な心理状態を、私も同じように持っていたかもしれないと思つた。当時の東京の風景と学生生活が思い起こされて懐かしさを覚えると同時に、身近にいた友人が、とても豊かで純粹な感性を持っていて、それが今もなお変わっていないことがとても嬉しく思えた。

大田氏は大学を卒業して大手印刷会社に就職



し、その後退職して故郷の飛騨高山に帰り、今は高校の先生をしている。最近では年賀状のやりとりをするぐらいだが、今年の年賀状には高山で撮った星空の写真が印刷されていて、いかにも彼らしいと思えた。生き方が一貫していて、それは年賀状にも小説にもストレートに表れており、都会で生活してきた私には、彼の生き方そのものが懐かしいものだった。それは自分が失ったのか、それとも最初から持っていなかったのかもしれないが、いずれにせよ、今の自分には「彼方」にあって手の届かないものである。

奇しくも、今年二十五年ぶりに同窓会が開かれることになった。みなそれぞれ立派になって、髪の毛も薄くなっていることだろう。『夕焼けの彼方に』は青春小説であるが、著者が過ぎ去った青春を懐かしんでいることを題名が語っている。

今、私は人生の黄昏に入りつつある。青春は夕焼

けの彼方にあつて、懐かしく思い起こされるのである。

ところで、私の小説は短いものを書き溜めて、少しずつ人の目にも触れるようになりつつあるが、それは恥ずかしいことではあるものの、甚だ気楽である。これが本業の論文となるとそうはいかず、人の目に触れるのは恥ずかしいというより恐ろしい。研究者（自分でそういうのもおこがましいが）としては長い「引きこもり」状態にある。小説を書くことは、そんな自分にとって「治療」なのかもしれないなどと思うこともあるが、それは自己韜晦で、大田氏の小説とは随分と異質である。

（学習院大学）